

◆半紙二行たて書きに臨書して下さい。出品料440円

第七回

1、字句「彼故為多奇」

2、形式「半紙タテ使用。右に「彼故為」、左に「多奇」と臨書し、左余白に落款

「〇〇臨」と書き入れる。

3、概観「前号で筆の面の遣い方について述べたが、筆はあらゆる面を自由自在に遣うことができなければならない。その上、動きながら、いつも浮沈を心懸ける。ある時は筆を突き、ある時は筆を引き上げるといった抑揚用筆が必要なのである。このことは筆の毛の弾力を遣うことであり、どんな柔らかい毛であっても、その弾力を感じつつ、それを利用して抑揚することが望ましい。このような動きをしなければ立体感を生まれてこない。筆圧の変化のない程、その書は平面的となるのは当然のことです。

4、各字のポイント

彼 「イ」ぐんと打ち込み、「:」は意連綿。旁は△で筆を突き、右肩を引き上げる。

故 上字からするとかなり小さい。二画目から次字への連綿線までいっきに書いている。線の強弱は見られない。

為 頭部に比べると大きく回転している。

多 右から左下への四筆線、全て方向を変えている。線の抑揚が見事に表現されている。

奇 これも横画三線微妙に方向を変化させている。特に長横画は、起筆で強く突き、送筆では筆を引き上げている。



十七帖・王羲之

半紙課題(予告)

(十二月二十二日締切)

平岡華雪先生書

山深くして鳥聲無し(王維)

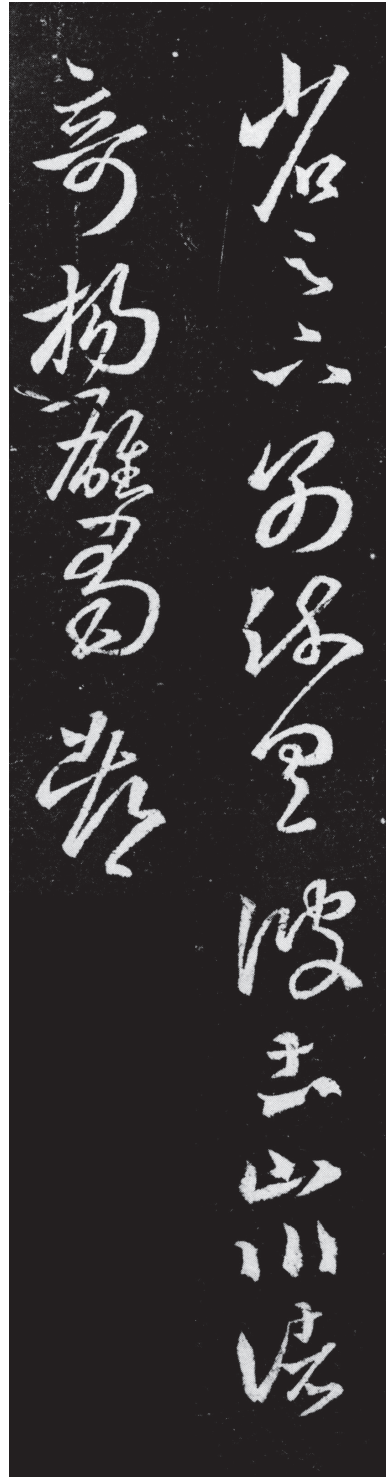


訳：鳥の声もしない深山の中。

平岡華雪先生書

枯れ萩に残る夕日もうせにけり(山籠)





（天来書院）

省足下別疏。具彼土山川諸奇。楊雄蜀都。足下の別疏を省て、彼土の山川諸奇を具にす。楊雄の蜀都（現代語訳）あなたのお手紙と、いっしょに添えてありました別紙に、蜀の地の山川の素晴らしい景観が詳しく紹介されており、あなた程詳しく述べてありません。書物で楊雄の『蜀都賦』や（左太冲の『三都賦』）を読んだことがありますが、あなた程詳しく述べてありません。

※随意部参考（半紙・条幅）としてもご利用下さい。抜粋可。
随意部半紙は無料。随意部条幅は一枚目無料、二枚目から五五〇円。
バーコード券に「条臨」とご記入下さい。名簿は条幅部で「臨」と表示されます。

一字書（十一月二十二日締切）

課題

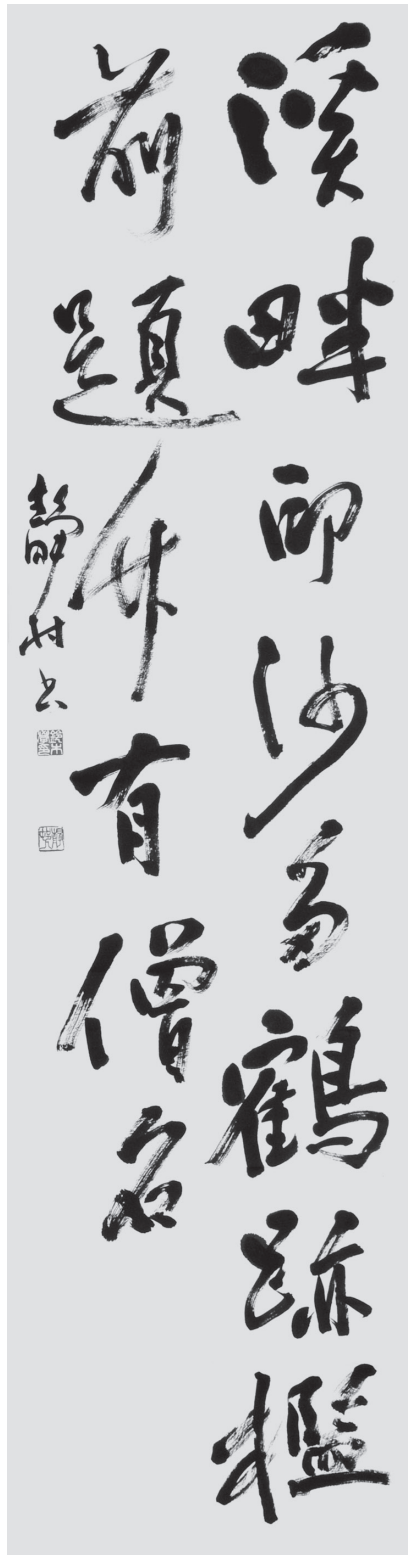
奪

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に

一字と記入 段級は無記入

A
鈴木静村先生書

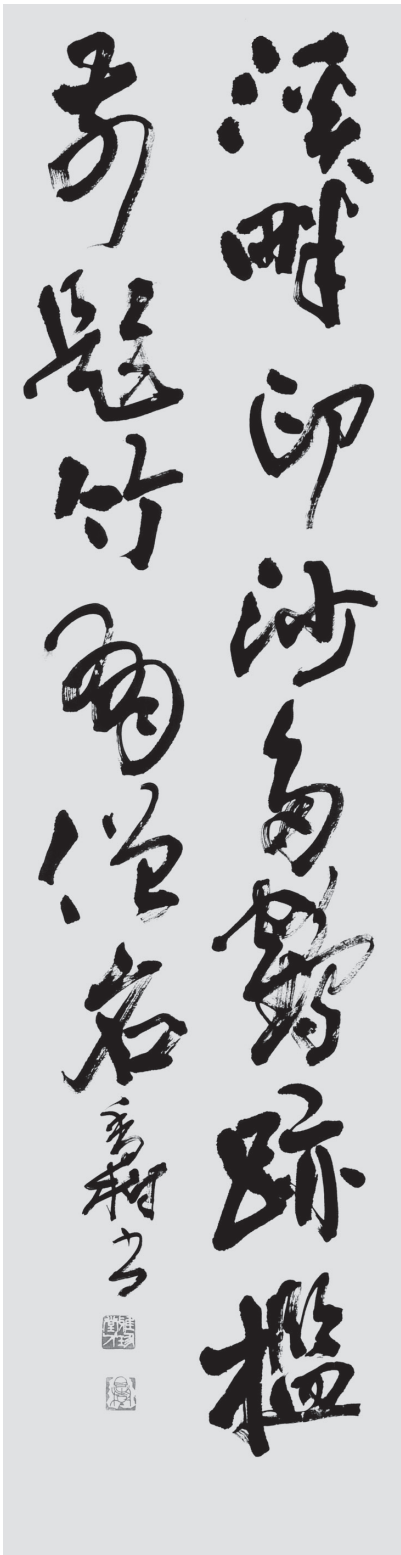
溪畔印沙多鶴跡 檻前題竹有僧名 (李山甫)
溪畔沙に印して鶴跡多く、檻前竹に題して僧名有り。



B

高橋香樹会長書

溪 次字と共にニジミが出る位。畔 傍の二画目から強く縦画に入筆が大切。印 末画を長く払ってもよい。沙 傍の末画を左下に強く延ばし、斜画で余白を二分。多 下部の円弧はもう少し大きく。鶴 偏はこの書き方も多い。跡 やや小さく。檻 傍は偏より少し上げて。前 横画から入る筆順。題 末画の払い長くゆったり。竹 第一画長めに。有 墨継ぎ。僧 やや左へ、曾 の異体。名 前字同様左へ、口 キリッと締める。



行草単体の作。行の流れを表出するには、連綿線を用いるのが効果的だが、あえて単体にしてみた。前にも書いたが、字形を正方形、長方形を避け、変形による構成とした。しかし、難しい。「有」は書くことが多い字なので、王鐸を借りてみた。墨継ぎは「跡」と「竹」。

訳：溪のほとりの砂浜に鶴の足跡が多く、欄干の前の竹に詩が書いてあるが作者は僧である。

予告 (十二月二十二日締切)

稚子迎門松菊在

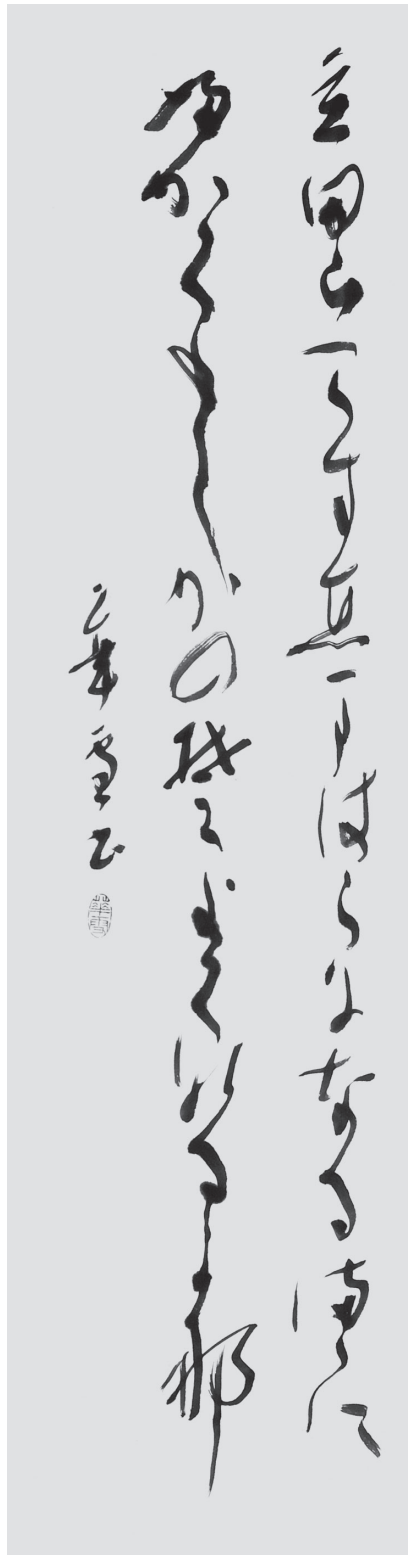
半壺濁酒慰平生 (趙孟頫)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

A

平岡華雪先生書

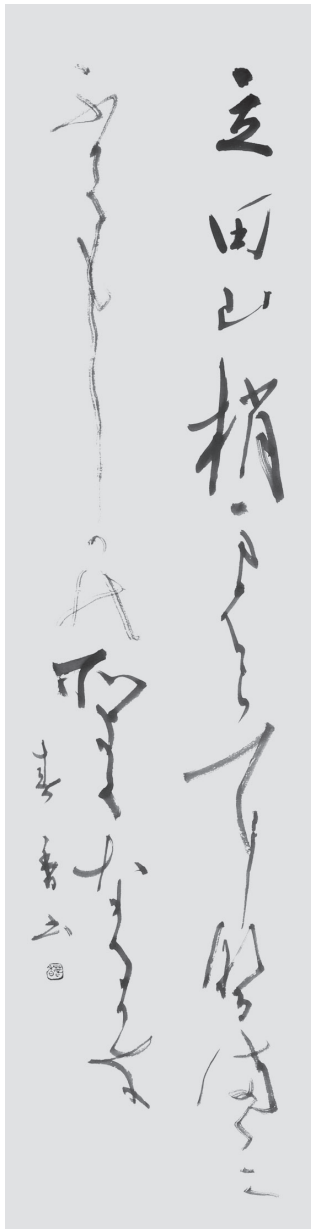
立田山こずゑまばらになるまゝに深くも鹿のそよぐなるかな(新古今和歌集)
立田山こす恵万はらるなる満に婦か久もしかの楚よ久那る可那



B

石原春香先生書

立田山梢万者ら耳那る満々二ふ可くもし可能所よ久なる可奈



新古今和歌集：鎌倉時代初期に後鳥羽上皇の勅撰和歌集(天皇・上皇の命により編纂された歌集)作者俊恵法師・源俊頼の子。平安時代末期の僧。歌人。早くに東大寺の僧になる。

学び方

歌意：立田山は落葉して木末がまばらになるにつれて、山の奥で鹿が落葉を鳴らしているらしい音が聞こえるよ。
オーソドックスな二行書きにしました。

疎と密は構成上必要です。「梢」「満」「所」は大きめに。



の様に一行に変化をつけて書いてみましょう。

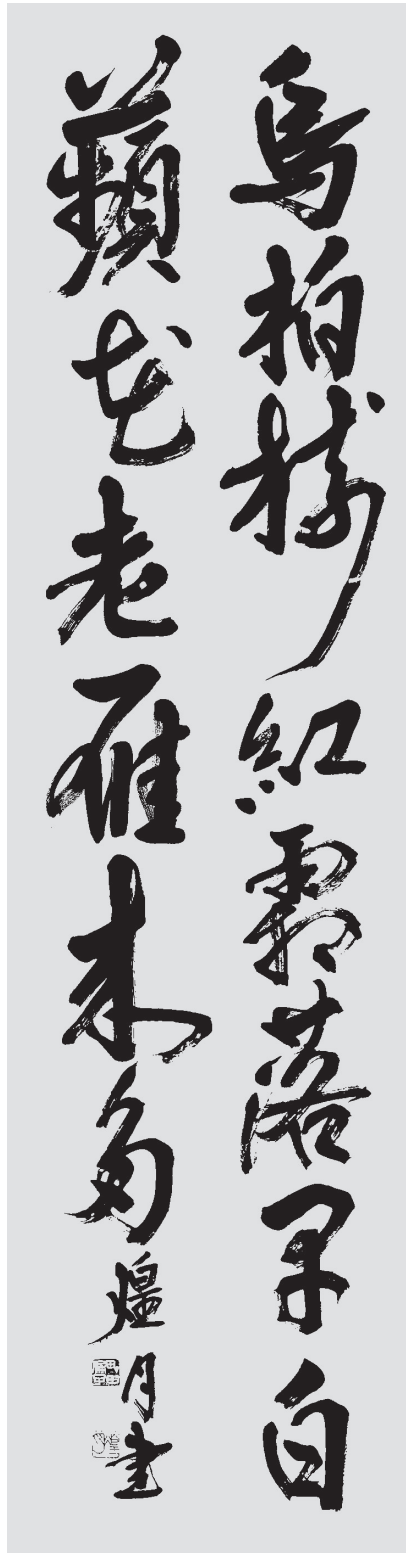
予告(十二月二十二日締切)

かさゝぎのわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける(新古今和歌集 中納言家持)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

町田 煌月 先生 書

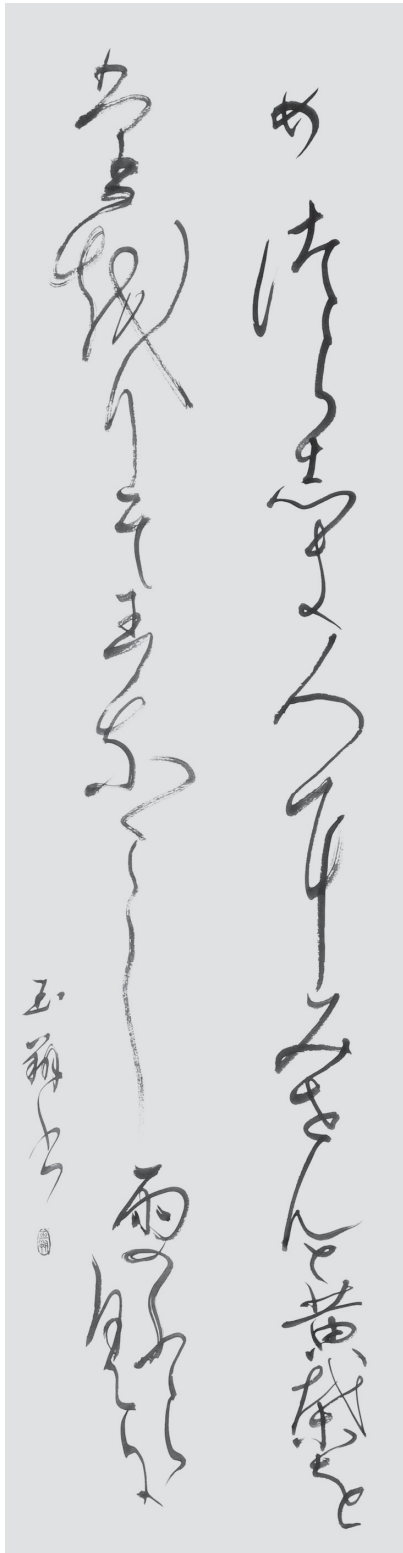
烏柏樹紅霜落早 白蘋花老雁來多 (周南老)
 烏柏樹は紅に霜落つる早く、白蘋花は古い雁来る多し。



訳：唐はぜの葉は赤くなつたが霜のために早くも散る、白いうきくさの花も末となり多くの雁がそこに宿している。

福田 玉翔 先生 書

めづらしき人に見せむと黄葉を手折りそわが来し雨の降らくに (万葉集 橘奈良麿)
 め徒ら志支人耳み世んと黄葉を堂越りそ王我こし雨のふら具尔



- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条随を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条随を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

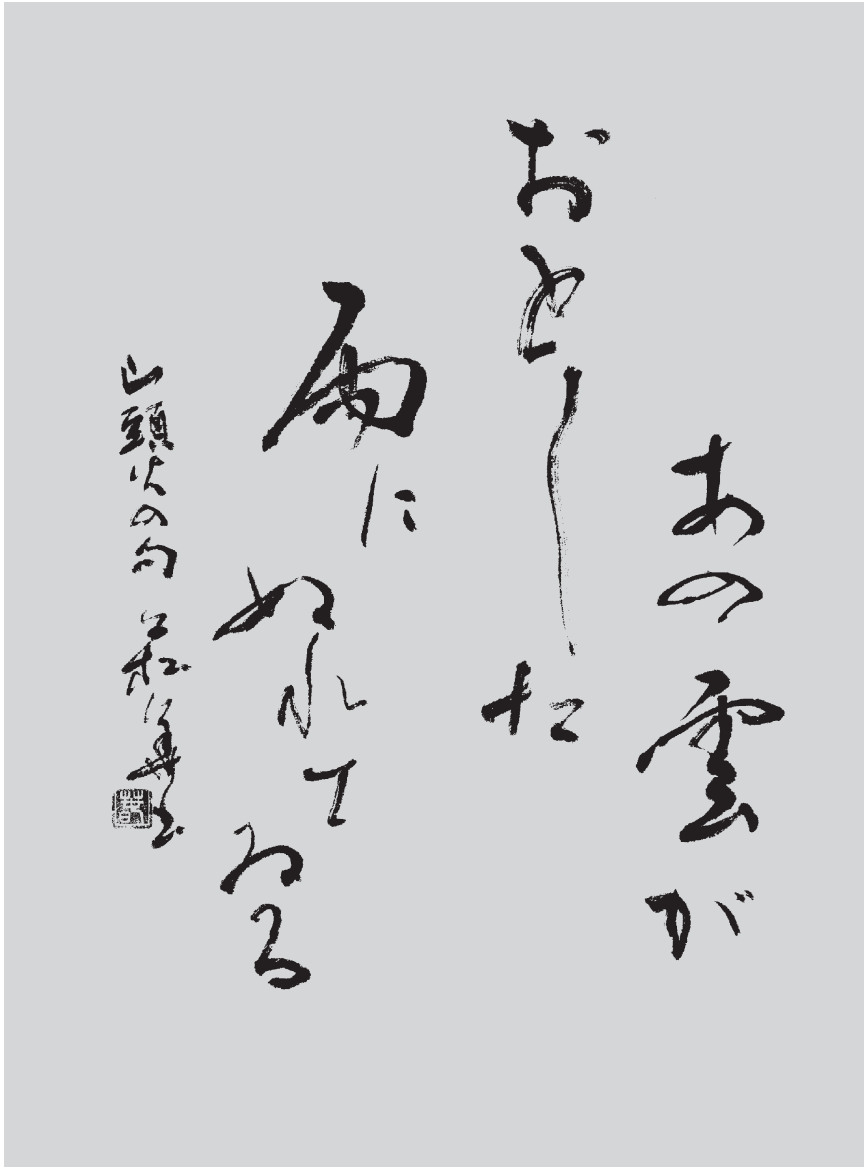
小暮 菘 華 先生 書

あの雲がおとした雨に

ぬれてゐる

(種田山頭火)

- 山頭火の自由律俳句です。放浪、漂泊の人生の中、自然界の
 すがままにまかせ、おもしろさを感じ取り、書きました。
- ・漢字は「雲」「雨」のみ。表現大らかに。
 - ・ひらがなが多いので平板にならないように。
 - ・中央部に余白を取りたい。



種田山頭火(一八八二～一九四〇)山口県に地主の長男として生まれる。自由律の俳人。本名、正一。山口中学卒、早稲田大学中退、酒蔵業を営んでいた家が二年続けて酒が腐敗し倒産、母が若くして自死。荻原井泉水に師事「層雲」に属するが、その翌年から漂泊の旅に出る。一九二五年、熊本市、報恩寺で出家得度し、禅僧として各地を行乞しながら、生涯で八万余りの句を詠んだ。又、其中庵、一草庵などに転住、一草庵にて死去する。代表作「草子塔」はじめ随筆、雑記など六十八作。

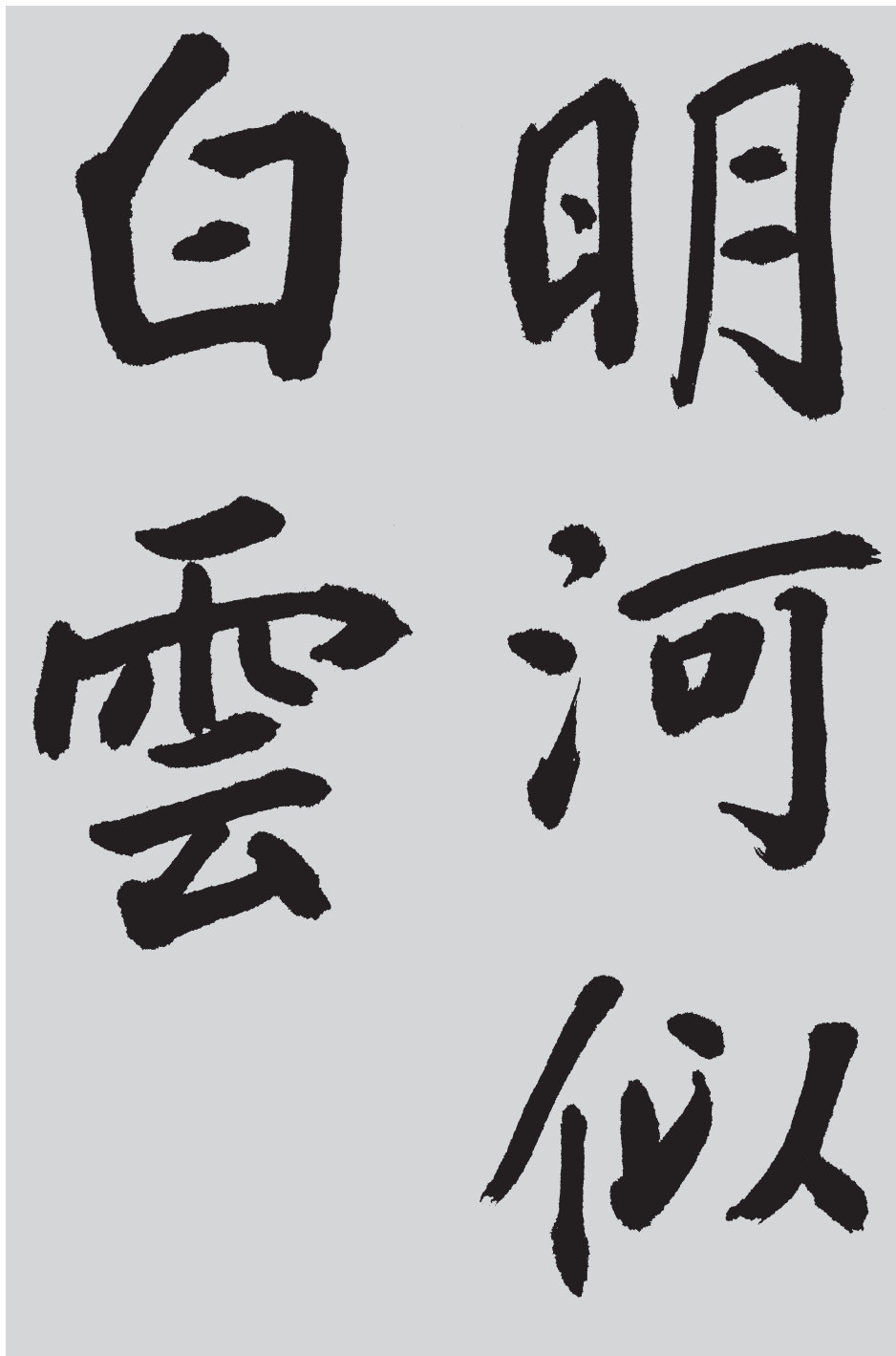
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料550円。

- ①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

明河白雲に似たり（環徐）

訳：天の川は白雲が流れるのに似ている。



〈点画のつけ・はなし（接筆）〉

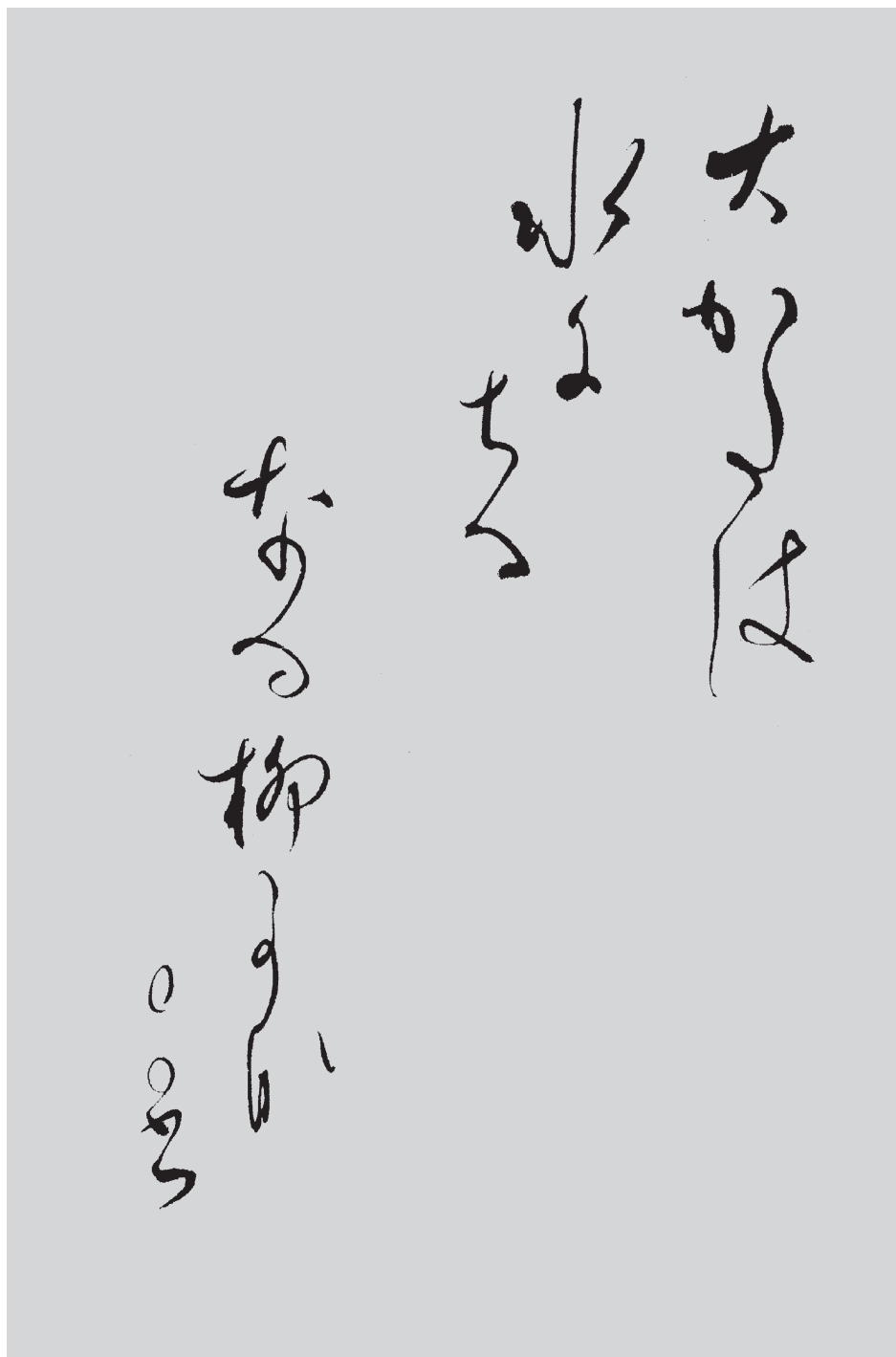
小学校では、点画はきちっとつけないと注意をうける。華雪先生は「放ち」が多い。ですから、窓が開いて明るく涼しい。接する場合も、浅く接している。「雲」の第四画の夕テ画は、わずかな空きがある。五・六画も深くは入っていません。「河」三画目鋭く。「白」四画目太く、短く。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙（3×4 cm位）に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

- ①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

大かたは水にちるなる柳かな(烏頭子)
大か多は水^た尔^にちるなる柳^か可^な那



〈渴筆の表出〉

潤渴、特に渴筆をどう表していくか。初歩段階の人には、難しい一面です。墨継ぎに「きまり」はありません。含墨をできるだけ長持ちさせ、渴筆線の表出に挑戦してほしいものです。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

石田愁華先生書

親朋盡一哭（杜甫）
親朋一哭を尽し

親 親 親
朋 朋 朋
盡 盡 盡
一 哭 一 哭 一 哭

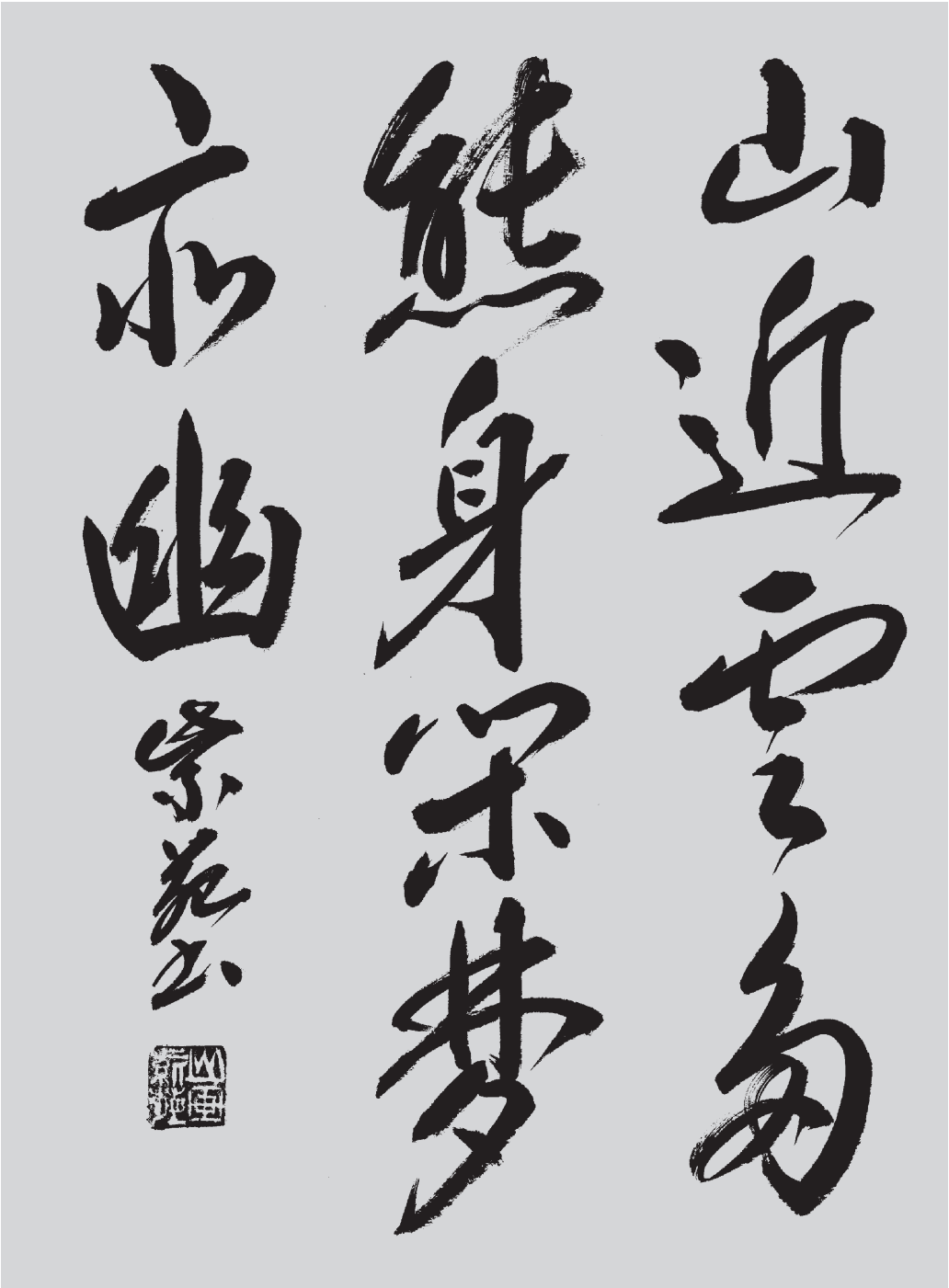
愁華書


訳：見送る親戚や友人が声をそろえ、わっと一度泣く声の終わったとき

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円。

山田紫苑先生書

山近雲多態 身閑夢亦幽（程致道）
山近く雲に態多く、身閑に夢亦幽なり。



訳：山が近くて雲はさまざまに姿を変える。身は物事にわずらわされず静閑であるから夢もまたしぜんに幽玄である。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

湯澤春翠先生書

川上香蓉先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)

正教授 創作部門 (自運作品、自由形式) で出品。二名の審査員による合計点数で優秀作品掲載。

漸う夜寒に成る程、雁鳴き来る頃、

萩の下葉、色付く程、早稲刈り干すなど、

取り集めたる事は、秋のみぞ多かる。

また、野分の朝こそ、をかしけれ。

鳥と我々の祖先とは、今よりもずっと

親しい交際をしていたことが彼らの名前

からでも想像し得られると私は思う。

課題1 (初段階以上)

漸う夜寒に成る程、雁鳴き来る頃、萩の下葉、色付く程、早稲刈り干すなど、取り集めたる事は、秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそ、をかしけれ。

『徒然草』吉田兼好

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン (黒色) を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入 (色は黒) はじめて出品される方は私製の紙 (3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 受験料は一、〇二〇円
- (4) 会員外は会員外出品料四六〇円を加算
- (5) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)
- (6) 課題1 九九〇円
- (7) 課題2 五五〇円

課題2 (初段階以下)

鳥と我々の祖先とは、今よりもずっと親しい交際をしていたことが彼らの名前からでも想像し得られると私は思う。

『鳥の名と昔話』柳田國男